

漱石作品論集成

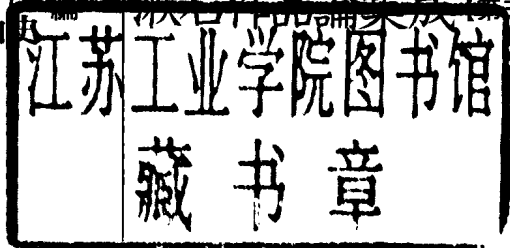
〔四三三〕

虞美人草・野分・坑夫

虞美人草・野分・坑夫

浅田 隆
木股知也 編

漱石作品論集成【第三卷】



桜
楓
社



漱石作品論集成〔第三卷〕

虞美人草・野分・坑夫

【発行】……………一九九一年七月一〇日

【編者】……………浅田 隆・木股知史

【発行者】……………坂倉良一

【印刷者】……………朝日精版印刷株式会社

〒101 東京都千代田区猿樂町一―三―一

株 桜 楓 社

電話 〇三―三―九五―八七七―

振替 東京六―一八〇二〇

ISBN4-273-02412-8 C1093

1991 T.A.&S.K. ©

浅田 隆（あさだ たかし）

一九四三年大阪に生れる

立命館大学卒業

同大学院（修）修了

現在奈良大学

木股知史（きまた さとし）

一九五一年兵庫県に生れる

立命館大学卒業

同大学院（博）修了

現在相愛大学

『漱石作品論集成』刊行にあたって

現在の近代文学研究は学際的な成果を取り入れつつめざましい展開を見せています。とりわけ漱石研究においては作家論・作品論を問わず、じつにさまざまな方法と視点によつてユニークな論考が提出されています。しかし、そうした貴重な問題提起が十分に活用されていない現状も否定できません。そこで漱石研究の体系化への一助として、決定版全集刊行以後飛躍的に進展した昭和十年代から現在までの重要な論文を精選、十二巻として作品別に編集することにしたしました。

この『漱石作品論集成』は、既成の叢書・講座などにとらわれず、漱石研究五十年の史的展開をできるかぎり同時代の文学（研究）状況とのかかわりのなかでとらえ、あわせて漱石研究における論争（史）の位置づけを試みました。

巻末の「解説」は、編集担当者と企画委員との（鼎談）方式で、新鮮な発想による問題提起に努めました。

監修

玉井 敬之

企画委員

浅田 隆

浅野 洋

太田 登

鳥井 正晴

藤井 淑禎

堀部 功夫

村田 好哉

虞美人草

「虞美人草」論……………	平岡 敏夫……………	9
漱石の反自然主義をめぐって ——『虞美人草』の周辺——……………	遠藤 祐……………	19
『虞美人草』——文明の功罪——……………	熊坂 敦子……………	35
喜劇の時代——『虞美人草』——……………	越智 治雄……………	47
二つの「退なる」もの——『虞美人草』周辺……………	竹盛 天雄……………	63
虚構と時間——『虞美人草』の世界——……………	石崎 等……………	72
クレオパトラと藤尾……………	平川 祐弘……………	85

野分

『虞美人草』論ノオト……………	大久保典夫……………	98
『虞美人草』の文脈……………	磯田 光一……………	107
「虞美人草」―藤尾の死をめぐる序章……………	内田 道雄……………	110
母を打つ―『虞美人草』……………	米田 利昭……………	117
野分……………	越智 治雄……………	129
『野分』私論……………	西垣 勤……………	136
『野分』考―意図と表現の間……………	池内 輝雄……………	144
観念と現実―『野分』論……………	小泉浩一郎……………	153

坑夫

『野分』―再びそのへ文学へとは何か―……………佐藤 泰正……………166

『野分』論……………酒井 英行……………175

「意識の流れ」小説の伝統
―『坑夫』『盲目の川』『いの三つのもの』……………中村真一郎……………189

漱石『坑夫』試論―坑道と梯子―……………佐々木 充……………196

『坑夫』論……………石嶋 淳子……………210

『坑夫』―へ意識の流れへの試み―……………佐藤 泰正……………221

『坑夫』論……………酒井 英行……………233

鼎

談

「坑夫」論―意図と方法―……………重松 泰雄……………

243

浅田 隆・木股知史・鳥井正晴(司会)……………

257

虞美人草

「虞美人草」論

平岡敏夫

一 「定説」への疑問

「虞美人草」は朝日入社第一作としてのみ記憶されているかのごとくで、今日これを好意的に扱う文学史家はまれである。「虞美人草」批判の極北はおそらく唐木順三氏であろう。

『虞美人草』（四十年六月以後）に多くの頁をさくことは我々には愚である。初めての新聞小説のために、固くなつてゐると同時に、読者を倦かせないために筋を面白くはこばせようとする意識が眼立つて我々を退屈させる。美字麗句の洪水、伏線への関心、其処から生れる匠気、なんとなく品のない、また思想のない小説である。⁽¹⁾

『現代日本文学序説』（昭7）に収められたこの「虞美人草」観は、この書の後代に及ぼした影響と同様に、現在の「虞美人草」のイメージを決定しているかのごとくである。そしておそらくはこの見解の源流に正宗白鳥の次のような見方があるはずである。

宗近の如きも、作者の道徳心から造り上げられた人物で、伏姫伝受の玉の一つを有つてゐる大江大川の徒と同一視すべきものである。「虞美人草」を通して見られる作者漱石が、疑問のない頑強なる道徳心を保持してゐることは、八大伝を通して見

られる曲亭馬琴と同様である。知識階級の通俗読者が、漱石の作品を愛誦する一半の理由は、この通常道徳が作品の基調となつてゐるのに本づくのであるまいか。⁽²⁾

右の白鳥文の三年後に執筆された前掲唐木文には、「虞美人草」に於ける悲劇と道徳の勝利は飽くまでコムベンシヨナルなるそれであつた。世俗社会の道義の、人間喜劇に対する勝利であつた。更に云へば、宗近の義理と人情の封建的正義感の、ブルジョアの輕薄に対する勝利であつた。」とあり、『虞美人草』に於て道徳をしかく簡単にまた旧式に考へて満足した漱石」という把握も見える。作者の道徳心から造り上げられた人物・作品、その根底にある「通常道徳」「世俗社会の道義」「コムベンシヨナルなるそれ」「義理と人情の封建的正義感」——要するに通俗的勸懲小説とする見解において両者は一致している。そして、今日なおこうした見解が文学史における「虞美人草」の位置を決定しているともいえるのであり、これらに対する反指定なくしては「虞美人草」把握は一步も動かぬはずである。

ところで漱石批判者ではなく、小宮豊隆氏などの場合はどうか。小宮豊隆・森田草平等には綿密な「虞美人草」論があり、至れり尽くせりだが、小宮氏にして次のような箇所があることに注意したい。

氏はこの作品の文章が「俳句を繋げて行くやうな、美しい詩を書く時の、骨の折れる文章」であることをいって、

言ふまでもなく、此所で俳句的表現といふのは、それ自身に特殊な美しいリズムとメロディーとを持つた圧搾された表現であつた。それは圧搾されてゐるだけに、刺激が強い。然もその刺激の強い、圧搾された表現が、百二十七回に亘つて続くのである。是はまさにワンダフルな仕事であつた。作者は苦しかつたに違ひない。然しそれとともに、息のつけない読者も亦苦しいといふ事実を、どうする事も出来ないのである。⁽³⁾

「特殊な美しいリズムとメロディー」などといっているが、同文で「文章に厚化粧があり、会話に厚化粧があり」と述べていることからかも知れるように、けっきょく、その三年前に世に出た唐木文の「美字麗句の洪水……」という把握とかわりはないのである。私の注意を引くのは「息のつけない読者も亦苦しいといふ事実」だが、はたして読者は息がつけずに苦しかったのか、そしてこの「美字麗句」「厚化粧」を書く漱石は苦しかったのか、という疑問があるのだ。漱石がこの入社第一作を書くのにどれほど力を尽くして苦しんだかということと、この「美字麗句の洪水」が作者および読者にとって苦しかったということとは問題が別である。ことはこの「美文」の有効性にかかつており、同時にそれは「通常道徳」による「勸懲」という内容の有効性と一体である。内容における勸懲と表現における美文というふうにいえばわかりやすいが、実は表裏一体にはかならぬこれら二つをぬきにしては「虞美人草」を再論することはできないということをまず確認しておきたい。

「我々を退屈させる」(前掲唐木)といい、「息のつけない読者も

亦苦しい」(前掲小宮)というが、「我々」「読者」とはいうまでもなく論者それ自身であつて、当時の読者は「多大の興味をもつて拝見いたして居りました虞美人草がもはやおしまひとは情なくなります。」⁽⁴⁾といった工合であり、この作の人氣・評判についてはいふまでもあるまい。私自身についていえば、数年前読みかえたとき、

おもしろくて一気に読んだし、今度また何度か読み返してみても退屈とか息苦しいとかの印象とはまるで逆であつた。恣意というなら、荒正人氏の「今日読み返してみると、案外面白いことに気づく。類型としての人物を、こんなにも生きいきと捉える才能は、やはり独自のものと言わねばなるまい。リアリズム小説のものさしで計ることとは、意味がないのではないか。」⁽⁵⁾ということばを引こう。「女主人公の少ない漱石文学のなかでは、珍しく藤尾さんといふ情の強い女性を描いて、非常に受けたもので」「現代になおしても相当面白い作品ではないかと思ふ。」⁽⁶⁾という林芙美子の批評を引用してもよい。「リアリズム小説のものさし」を荒氏は指摘したが、現在の作品評価の基軸にいまなお自然主義文学史観があり、それは昭和初期の明治文学研究熱のなかでプロレタリア文学の影響と相俟って定着してきたのではないかと予想される。すなわち前掲の白鳥(昭3)・唐木(昭6執筆、昭7発表)・小宮(昭10)の「虞美人草」⁽⁷⁾評価に、共通するものを認めうるゆえんである。湯地孝氏の漱石戯作者論(昭7)も同様の基盤に属する。この仮定の当否はさておくとしても、現在ようやく活発となってきた新しい近代文学史のイメージ、文学史の書きかえの問題、なおざりにされていた可能性の発掘の作業は、文学史家の主体にもとづく個々の作品の読みなおし、価値転換による再評価ということをぬきにしては不可能ということがある。そこ

では作品評価の「ものさし」としての文学史観それ自体の再検討の作業と併行しつつ、ひとつひとつの作品をいわゆる「定説」から解放することがなされねばならぬのである。

二 「勸懲」と「美文」——「文明」批判

「虞美人草」が一種の勸懲小説であることは動かぬところであろう。問題は「勸懲」の意味であり、その基準たる「道義」の内容にある。「徳義心が欠乏した女」藤尾を「仕舞に殺すのが一篇の主意」であり、最後につけた哲学「セオリー」を説明する為めに全篇をかいてゐる」という周知の自解（明40・7・19小宮宛書簡）があるが、「悲劇」すなわち「生死の大問題」を打ち出すことで「人生の第一義は道義にありとの命題」を樹立せんとするのが一篇の主題であることは明白である。

「虞美人草」の教ふる教訓も結構である。道徳や教訓を口にするのは、文芸上の異端かも知れぬ、時勢後れかも知れぬ、併し異端でも時勢後れでもかまはぬ。面白いのは面白い。殊に近頃は肉情文学に恐縮してゐる。幾何理屈があつても、此ばかりは恐縮する。理屈があるから猶更恐縮せざるを得ぬ。余は飽まで「虞美人草」に見えるやうな道徳教訓に困窮を上げる。

「虞美人草」連載がおわたつたその年の戸川秋骨の批評だが、「勸懲」をおもしろいとする意見に同感できる何かがこの作品にはある。それに関して注意すべきは善と惡の対立が「虞美人草」の場合、「過去」と「文明」（当世）の対立と重なっている事実である。ここを見逃すか否かで勸懲の意味が異なる。馬琴と同一視する白鳥の場合にはこの視点が入っていない。「過去」である小夜子・孤堂先

生が上京し、「文明の淑女」たる藤尾にひかれる「尤も当世なもの」小野と出会うとき、「小説は是から始まる」（九）。小野は「過去」につながるながら「文明」にひかれている。従来この小夜子・孤堂先生を実体的ない影法師的なものに受けとっていたようだが、実はかぎりない同情・共感を漱石はこの「過去」に注いでいるのである。最初に掲げた小宮宛書簡で、藤尾を嫌な女、徳義心が欠乏した女だとして否定した漱石は「決してあんな女をいゝと思つちやいけない。小夜子といふ女の方がいくらか可憐だから分りやしない。」として藤尾に対するものとして小夜子を支持しているが、小夜子が買物をいっしょにと小野の下宿に來たのを追ひ返す場面、買物を一人でやって訪れたときの小野と孤堂先生との場面、浅井をやつて断らせる場面すべては残酷なくらいに「過去」は深くとらえられているのだ。

「色白く、傾く月の影に生まれて小夜と云ふ。母なきを、つゝまやかに暮らす親一人子一人の京の住居に、盃蘭盆の燈籠を掛けてより五遍になる。」「物の憐れは小さき人の肩にあつまる。」「東西の春は二百里の鉄路に連なるを、願の糸の一筋に、恋こそ誠なれと、髪に掛けたる丈長を頼はせながら、長き夜を縫ふて走る。古き五年は夢である。」「小夜子の夢は命よりも明らかである。」「（七）——この「美文」は作者の「過去」に向けられたシンパシイの深さが要求したものであり、漱石は心をこめてのびのびと書いている。モチーフをそのままに展開させる文章に息苦しさがあるはずがないのだ。このことを逆にいえば反感の場合も「美文」は成立する。強烈なアンチパシイをそのままに展開させる場合はそれほど多くはないが、藤尾と謎の女（母）の会話を叙して「此作者は趣なき会話を嫌ふ」と作中に述べ、「毫端に泥を含んで双手に筆を運らし難き心

地がする」「嬉しからぬ親子の半面を最も簡短に叙するは此作者の切なき義務である」(八)といい、「謎の女」の宗近の父への話を写しては「筆は、一步も前へ進むことが厭だと云ふ」(十)などと記すのはその明瞭なあらわれで、人事・自然を問わず、善悪好悪をはつきり示す主観の露出が「美文」をなしているのである。雅俗折衷体の一変型ともみられるが、漱石の場合、平均的一般的性格の散文をとりえないほどに強烈な主体があるわけで、「勸懲」と「美文」は見合っていることになる。「美文」の有効性とはこのモチーフの強烈さ・真率さが人をひきつけることをいうのだ。

だが、なぜに「過去」はそれほど共感されるか。一口にいえば「道義」に生きているからだ。現代の「文明」が見失っているものがそこにはあるとみただのである。

人の娘は玩具じやないぜ。博士の称号と小夜と引き替にされて堪るものか。考へて見るがいゝ。如何な貧乏人の娘でも活物だよ。私から云へば大事な娘だ。人一人殺しても博士になる気かと小野に聞いてくれ。それから、さう云つて呉れ。井上孤堂は法律上の契約よりも徳義上の契約を重んずる人間だつて、

——月々金を貢いでやる？ 貢いで呉れと誰が頼んだ。小野の世話をしたのは、泣き付いて来て可愛想だから、好意づくでした事だ。何だ物質的の補助をするなんて、失礼千万な。(十八)

右の孤堂先生の怒りを正当とできるかどうかが評価のわかれ目である。ここにある対立をあげれば、博士・法律・金・物質的に対して貧乏人・活物・人一人・徳義・好意ということになるが、この「文明」対「過去」において、「過去」の意味をたんに形式としての「封建的」ということで切り捨てることができるかどうか。五年間、命

よりも明らかに誠の恋を抱いて生きてきた小夜子ならばこそ、小野一人をたよりとして孤堂先生は上京を決意したのであり、「人一人殺しても博士になる気か」と怒つたのだ。こうした「過去」をふみにじろうとする「文明」はむろん批判されねばならない。「徳義」の実体はここにあり、博士・法律・金・物質的、さてはその象徴たる金時計の皮相な外面は否定されたのである。「虞美人草」の「勸懲」が文明批判のかたちをとっているという事実は、何よりもその「道義」が通俗道徳ではないことを意味する。通俗とは皮相な「文明」にそのままのつかっていることだからである。

藤尾を殺すことで「人生の第一義は道義にありとの命題」をうち出す主題それ自体が反通俗であることは、藤尾を救ってくれという読者の願いや、前掲小宮宛書簡で、藤尾をけつしていいと思つてはいけない(つまり、進行途中にせよ、小宮氏さえも藤尾に同情、共感を示した)としている事実からも知れよう。つまり漱石は読者に反してあえて「文明」の淑女たる藤尾を殺し、「文明」批判を成就したのである。しかし、作品構造としては「過去」は「文明」を直接反省せしめる力はなく、宗近らのはたらきで小野は悔悟し、藤尾は死ぬことになるわけだが、その動因は孤堂先生の怒りにあり、宗近らは「過去」に共感しうるもの、むしろ「過去」と一体のものに見えるだろう。この点を唐木氏は、「宗近の義理と人情の封建的正義感の、ブルジョアの輕薄に対する勝利」とし、旧式道徳とみて否定したのだが、この道徳・勝利の意味が唐木氏とは逆になるわけである。漱石の「文明」批判については江藤淳氏もその著に一章を設けているし、とくに四年後の「現代日本の開化」(明44・8)など言及する人は多いが、ふしぎにこの作は見逃されるのである。「虞美

人草」は何よりも「文明」批判小説として読まれねばならない。

三 「道義」と「恋愛」

むしろ問題は右の概観ではまだかたつかない。宗近にいわれた小野が「真面目な処置は、出来る丈早く、小夜子と結婚するのです。」

(十八)と答えて小夜子に帰るのは、「生命の第一義的な燃焼である恋愛を否定して、心にもない義理に生きるのが『道』だといおうとしている」と片岡良一氏も説く。これは「虞美人草」批判の眼目をなす一点で唐木説にも重なる。だが、藤尾と小野はそういう「恋愛」で結ばれているのではない。「藤尾は己れの為にする愛を解する。人の為にする愛の、存在し得るやと考へた事もない。詩趣はある。道義はない。」「成立つものは原則を外れた恋」「変則の愛」(十二)だと作者は述べている。小野の場合は金であり書斎であり金時計である。それらのあるところに成立した「恋」なのだ。「道義」にはずれた「恋」を漱石は認めていないが、それは「生命の第一義的な燃焼である恋愛」でもなかったのだ。「道義」にはずれた「恋」とは、前記をくり返せば、貧乏人・活物・人一人・徳義・好意等に対立する博士・法律・金・物質的等にもとづく「恋」である。「文明は人の神経を髪刺に削つて、人の精神を櫛木と鈍くする」(十二)が、そこに成立しようとする、精神のない皮相な「文明」の「恋」だからこそ否定されるのであり、そういう虚偽より目覚めたとき、小野は藤尾を捨てたのである。

小夜子の場合どうか。片岡氏は「好きでもないどころかそのじめじめした生き方の故に嫌悪をさえ感じている小夜子と、道義故に無理に小野さんを結びつけて得たりとしている」とするが、引

越した翌日の小夜子を叙して「不断着の綿入さへ見すばらしく詩人の眼に映る」とし、藤尾を思い出して「是だから過去は駄目だと心のうちに語るものがある。」(九)とたしかに述べている。また「いぢらしいのと見縊るのはある場合に於て一致する。小野さんは慥かに真面目に礼を云つた小夜子を見縊つた。然し其うちに露いぢらしい所があるとは気が付かなかつた。紫が祟つたからである。」(九)とも叙述する。ここにあるのは虚栄にとりつかれて「道義」にまだ目覚めぬ人間の眼であり、「紫の祟り」が解ければ「露いぢらしい所がある」と気づくはずのものであつた。「好きでもないどころかそのじめじめした生き方の故に嫌悪をさえ感じている小夜子」などとはけつして漱石は小野を通して書きえなかつた。すでにみたごとく「過去」への共感が「文明」批判の基軸になっているからだ。だからこそ小夜子の場合は「願の糸の一筋に恋こそ誠なれ」(七)ということになり「誠の恋」が想定されるわけである。「誠の恋」であるかもしれぬが小夜子・小野においては「生命の第一義的な燃焼である恋」ではなかつたという批判が出るかもしれない。しかし、もともと小野は藤尾の場合も同様にそういう「燃焼」のある人間としては出されておらず、したがって「心にもない義理に生きる」などと思うはずはないのだ。だからといって小野はまったくの木偶かというところではない。引例は省くが、不自然やむりのない弱い人間として出されていて、「類型としての人物を、こんなにも生きいきと捉え」(前掲)している点では、片岡氏が宗近について「それがかなり安易に過ぎたかたちのものではあるにしても、そういう困難な状況下に一応は正しくしかも悠々と生きているもののがたを、よく造型し得ている」というのとまさしく対応しているのである。

「それぞれの人物が、皆それぞれの個性を以て動き、宗近、藤尾のごとき一二の人物に至つては、殆んど活躍浮動の域にあると云つてもいい。」という赤木桁平の指摘も見逃すことはできない。

藤尾の「恋愛」は利己的であるが、(あるいは利己的であるがゆえに)恋愛であるというかもしれない。森田草平は漱石の人間を観る眼に道徳の眼と自然の眼とがあったというが、恋愛を自然のものとして、それと道徳とを対立させるとらえ方は、唐木氏の「それから」論をはじめ諸家のいうところである。これというなら「虞美人草」では漱石は「道義」と「恋愛」とを対立的ではなく統一(14)的にとらえているというべきで、「恋愛」をつねに「道義」と対立するものとのみとらえる見方でこれを論じるのは正しくない。恋愛は漱石の作品・生涯の枢軸であつたと小宮豊隆氏(15)はいうが、近代日本において大かたの評家がつねに男女間の近代性の象徴とすることがとき「恋愛」の存在を、漱石が信じていたかどうかは疑問である。「近代日本における『愛』の虚偽」を指摘したのは伊藤整氏だが、作品評価の基準となつてきた西欧近代文学の幻想もまた「恋愛」につきまといっている。こういう「恋愛」観からまず自由になることが藤尾——小野——小夜子関係把握においても重要である。「恋愛は必然でも、もしその必然の中に、『私』が含まれ、道理に悖るものが含まれてゐるとすれば、人は、その必然に反抗してまでも、道理に従ひ、『人間』として生き徹すべきである。——是が、後の漱石の意見であつた。」と小宮氏は指摘しているが、こういう「恋愛」観をもつただちに前近代的とすることはできぬのである。そこに明治人漱石の面目があり、こういう意識が、たとえば「虞美人草」前年の小栗風葉「青春」(明38、39)などの「恋愛」に対する批判になりうるの

ある。

四 文学史的位置——明治小説の骨格

「虞美人草」が文壇批判というポレミカルな姿勢でもって書かれていることは、前掲の戸川秋骨の感想にも出ているが、翌四十一年の片上天弦の「作者の謂はゆる詩趣即ち文芸が道義の根本に基かねばならぬ意を表象したもの」(「女主人公藤尾の死は、第一道義に立脚せぬ文芸の崩壊ではないか。」(16)という読みとりもあり、それに付随して言えば、「純文学」者小野の悔悟という作品構造にも意図は明らかである。より明白に示されているのは「虞美人草」執筆直前の講演「文芸の哲学的基礎」(明40・4)であり、そこではモーパッサンの『首飾り』を不愉快とし、作者に「一点の道義的同情」があるならば、虚栄心を折つて借金を返した「細君の心行き」「立派な心掛で立派な行動」を活かしてやらねばならぬといひ、「現代文学は皆此弊に陥つて居るとは無論断言しませんが、色々な点に於て此傾向を帯びて居ることは疑ひもない」と批判している。「如何に生きて然るべきかの解釈を与へて、平民に生存の意義を教へる」のが「文芸家」の天職という文学意識からする文壇批判である。「新しい理想か、深い理想か、広い理想があつて、之を世の中に実現しやうと思つても、世の中が馬鹿で之を実現させない時に、技巧は始めて此人の爲めに至大な用をなすのであります。」と講演を結んだとき、漱石内部には「虞美人草」のイメージはまったく明白であつたはずである。

これを啓蒙家意識と呼ぶこともできようが、政治小説以来、明治期を一貫する意識であり、たどれば近世以来の士大夫意識につなが